

八高古墳発掘調査進捗報告!

第2号 令和6年10月

八高古墳発掘調査、調査区Dの調査進む、八高古墳の周りの溝(周溝)検出。調査区B2調査完了。

8月7日から始まったD区の調査は、現在、八高古墳を巡る溝(周溝)を検出し掘り下げています。

現場をのぞいてもらうと“葺石”というこぶしだい えんれき拳大の円礫が並んでいるのがわかります。この礫群が周溝の縁にあたり、主に土留めの役割のために使用されます。周溝の外側には土手(周堤)しゅうていが築かれていることがあります。後世の開発で削平されたためか、今回の調査では確認されていませんが、周堤の縁にも葺石が敷かれ、周溝のなかには周堤から崩れ落ちた礫もみられました。また周溝からは埴輪はにわの破片も多数出土しています。さらに周溝が埋まった土の上部からは江戸時代中頃の肥前ひぜん(現在の佐賀県)辺りや瀬戸・美濃で焼かれた陶磁器、中世、古代に使われた遺物も出土しており、どうやら江戸時代中頃まで周溝は埋まらず、窪地として残っていたようです。明治の初めの地籍図ちせきず(土地利用図)や周溝の上に堆積している土から出土した遺物により窪地が畑地に変わるのは、江戸時代の終わり頃と思われます。名古屋大学の前身である第八高等学校が建つまでは、この辺りは古墳以外、畑地として利用されていたことがわかります。

また古墳の周溝が埋まった後に大きな穴が掘られ、焼き物を焼く道具かまどうぐ(窯道具)や壊れた窯の一部が捨てられた跡がみつかっています。この窯道具は、名古屋市立大学の学生が昭和40年代に墳丘を調査した際に採集した窯道具と一致しています。採集された遺物は埴輪と共に学生会館の2階に展示されています。



古墳の生活面(画面の下方に周溝の縁の礫群がみえる)



周溝の縁に敷かれた礫群



出土した埴輪



窯道具が捨てられていた穴



捨てられていた窯道具など